みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

Present State of the Traditional Communal House, “Nha Rong”, of Ethnic Minorities in the Central Highlands of Vietnam : A Case Study in Kon Tum and Gia Lai Province

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-04-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳沢, 英輔 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003852

国立民族学博物館研究報告37(2): 245-275 (2013)

研究ノート

ベトナム中部高原山岳少数民族の伝統的集会施設「ニャーロン」の現在
――コントゥム省，ジャライ省の事例から――

柳　沢　英　輔*

Present State of the Traditional Communal House, “Nha Rong”, of Ethnic Minorities in the Central Highlands of Vietnam: A Case Study in Kon Tum and Gia Lai Province

Eisuke Yanagisawa

本稿は，ベトナム中部高原に居住する山岳少数民族の伝統的な高床式集会施設「ニャーロン」を対象とする。ニャーロンのデザインは中部高原の各少数民族の伝統的な建築様式に基づいている。ニャーロンは古くより中部高原山岳少数民族の社会生活に重要な役割を果たしてきたが，近年，一部の地域では，森林資源の枯渇，キリスト教の普及，市場経済化以後の村人の生活スタイルの変化などを背景に，ニャーロンの役割や建築様式，落成式の儀礼内容に変化が見られる。本稿では，フィールド調査で得た民族誌的資料と文献資料に基づき，コントゥム省，ジャライ省におけるニャーロンの現状について考察する。

This paper focuses on the traditional communal house built on stilts, called the “nha rong”, of ethnic minorities living in the Central Highlands of Vietnam. The “nha rong” is designed on the basis of the traditional architectural style of each ethnic minority living in the Central Highlands. Although the “nha rong” has long played a key part in the social life of each ethnic minority, in some places recently, their roles, styles of architecture and inauguration ceremonies have changed with changes in various social backgrounds

*国立民族学博物館外来研究員

Key Words：ethnic minorities, communal house, Central Highlands of Vietnam
キーワード：少数民族，集会所，ベトナム中部高原

such as the depletion of forest resources, the diffusion of Christianity and changes in villagers' lifestyles after the market-oriented economic reforms. In this paper, I will examine the current condition of the "nha rong" in Kon Tum and Gia Lai Provinces based on ethnographic data and documents obtained in my field studies.

1　はじめに
2　ニャーロンの概要
　2.1　ニャーロンの定義
　2.2　ニャーロンの分布
　2.3　各民族のニャーロンの特徴
　　2.3.1　バナ族のニャーロン
　　2.3.2　ジャライ族のニャーロン
　　2.3.3　セダン族のニャーロン
　　2.3.4　ゼチエン族のニャーロン
3　ニャーロンの構造
　3.1　ニャーロンの建築
　3.2　ニャーロンの外観・内部
　3.3　近代的なニャーロン
4　ニャーロンの役割
　4.1　社会的役割
　4.2　政治的役割
　4.3　文化的役割
5　ニャーロンの落成式
6　おわりに

1　はじめに

ニャーロン（nhà rông[1)]）とは，ベトナム中部高原およびその周辺地域に居住する山岳少数民族の伝統的な建築様式に基づいて建てられた高床式の集会施設のことである。バナ（Ba-na）族の長老によれば，村の中心に大きくそびえ立つニャーロンは，各村落のシンボルであり，その大きさや美しさは，村落全体の力強さや団結力，経済力などを反映していると言う。「ニャーロンは村落の魂であり，ニャーロンが完成してはじめて村落は村落たり得る」（Nguyên Ngọc 2007: 40）とさえ言われるように，ニャーロンは，古くより中部高原山岳少数民族の村落生活に重要な役割を果たしてきた伝統文化の 1 つであると考えられる。近年，森林資源の枯渇や少数民族の生活スタイルの変化などを背景に，ニャーロンの役割や建築様式，落成式の内容などに変化が見られる。

本稿は，2006 年 11 月～ 2007 年 3 月，2008 年 1 月～ 2 月，2010 年 11 月～ 2011 年

図 1　コントゥム省，ジャライ省の位置

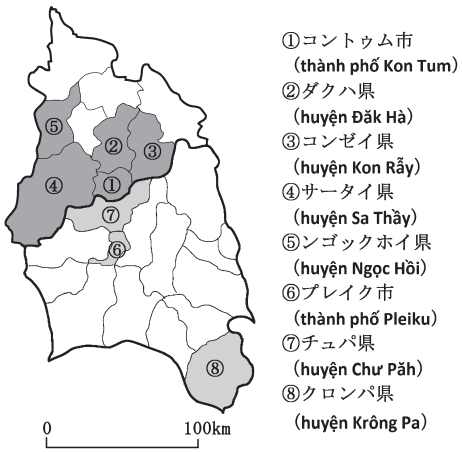

図 2　調査地域の位置

2 月の間，ベトナム中部高原北部のコントゥム（Kon Tum）省，ジャライ（Gia Lai）省（図 1）で行ったフィールド調査で得た民族誌的資料および文献資料に基づき，当該地域におけるニャーロンの現状について考察する。フィールド調査では，各少数民族村落[2]（làng 又は thôn）において，インタビュー，ニャーロンの観察・写真撮影・計測などを行った[3]。筆者が調査を行った村落がある地域（県，市）の位置を，図 2 の①～⑧に示す。インタビューは，村長（thôn trưởng），村の長老（già làng），ニャーロンの建築に中心的な役割を担った人物などに対して，キン族の調査助手とともに，主にベトナム語で行った。インタビューの内容は，ニャーロンの建築工程，建築に用いられた木材の種類とその調達方法，建築期間，建築年，建築費用，ニャーロンの使用用途などである。

2　ニャーロンの概要

2.1　ニャーロンの定義

ニャーロンという語は，多数派のキン（Kinh）族による包括的な呼称であり，先行研究では厳密に定義されていないが，一般的にはベトナム中部高原および周辺地域の少数民族村落にある高床式の集会施設のことを指す[4]。ニャーロンは，村落で最も大きな建築物であり，通常，各村落に 1 軒のみ存在する[5]。ニャーロンは，村落の住民

が共同で管理し，利用する集会所であり，一般の家屋であるニャーオー（nhà ở）とは機能面で明確に区別できる。

キン族がニャーロンと呼ぶ建築物には，中部高原の少数民族ごとに異なる呼称で呼ばれている建築物が含まれる。例えば，バナ族のルーン（*rôông* 又は *zôông*）[6]，ヴァル（*wal*），ジャライ（Gia-rai）族のルーン（*rôông*），ルオン（*ruông*），ブラウ（Brâu）族のルーン（*rôông*），コトゥ（Cơ-tu）族のグール（*gươl*），タオイ（Tà-ôi）族のロン（*ron* 又は *rộn*），ブルヴァンキウ（Bru-Vân Kiều）族のルーン（*roong*），スホ（*xu ho*），スコアン（*xu khoan*）などがある（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 46）。またこれらの建築物は，同一民族内でも居住する地域ごとに異なるサブグループ（nhóm）によって異なる名称で呼ばれることがある。例えば，ゼチエン（Giẻ-Triêng）族を例に挙げると，ヴェ（Ve）グループのチェン（*trêng*），チエン（Triêng）グループのモーン（*moong*）又はレーン（*rêêng*），ゼ（Giẻ）グループのムラオ（*mrao*），タオ（*tâo*），チェン（*trêng*）などの呼称がある（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 46）。

民族ごと，サブグループごとに様々な呼称があり，また建築の意匠や使用用途などは村落によっても異なるが，これらの建築物が，村落の集会施設としての役割を有する点は同様である。従って，本稿では，ベトナム中部高原とその周辺地域において汎民族集団的に見られる高床式の集会施設のことをニャーロンとして定義する。

現在，当該地域には建築様式の異なる 2 種類のニャーロンが存在する。本稿では，現地でのベトナム語の呼称を採用し，基本的に森林から得た建材を用いて建てられた草葺き屋根のニャーロンのことを「伝統的なニャーロン（nhà rông truyền thống）」，トタン屋根を採用し，コンクリート，トタン，ガラスなどを建材として用いて建てられたニャーロンのことを「近代的なニャーロン（nhà rông hiện đại）」と定義する。

2.2　ニャーロンの分布[7]

ニャーロンは，主にベトナム中部高原北部のコントゥム省，ジャライ省と中部クアンナム省北西部に集中して分布している。ニャーロンは，バナ族，セダン（Xơ-đăng）族，ジャライ族，ゼチエン族，ブラウ族，ロマム（Rơ-măm）族，コトゥ族，タオイ族，ブルヴァンキウ族の 9 つの少数民族村落に見られ，そのうち，ジャライ族を除く 8 つの民族グループがモン・クメール語派（オーストロアジア語族）に属している。ニャーロンの起源や発展の歴史については明らかになっていないが，当該地域ではもともとモン・クメール語派の民族が持つ伝統文化の一部であり[8]，後に，彼らと同じ地域に隣接して居住するマレー・ポリネシア語派（オーストロネシア語族）のジャラ

イ族に伝わったと想像できる。

東南アジア他地域の山岳民族の村落には，ニャーロンと同様の役割を有する集会所が見られる。例えば，フィリピン・ルソン島のボントック族，イフガオ族の男性集会所，インドネシア・スマトラ島のミナンカバウ族の集会所（ルマガダン），インド北東部アッサム州の先住民族の集会所などが挙げられる。またミクロネシアやメラネシアなどオセアニア島嶼部では，集会所，男子集会所は，ほぼ全域に分布しており，社会生活上重要な役割を果たしている（杉本 1987: 167）。

2.3　各民族のニャーロンの特徴

ニャーロンは，その特徴的な外観から，ベトナム中部高原少数民族の伝統文化を代表する建築物として広く知られている。ニャーロンの建築様式や内部の様子は村落ごとに異なるが，同じ民族集団，サブグループ内ではある程度の共通性も見られた。以下，筆者が調査を行ったバナ族，ジャライ族，セダン族，ゼチエン族村落のニャーロンの特徴について概観する。

2.3.1　バナ族のニャーロン

バナ族は，ベトナムにおける人口が 174,456 人（1999 年の政府統計）で，モン・クメール語派の中では中部高原で最大の少数民族である[9)]。主にコントゥム省，ジャライ省に居住し，ビンディン省およびフーイエン省西部にも一部が居住している。生業は，焼畑陸稲栽培の他，近年では水稲栽培やキャッサバ，コーヒー，バナナ，ゴムなど換金作物の栽培を行っている村も多い。女性は機織機で民族衣装を織り，男性は竹を編んでバスケットなど手工芸品を作る。ベトナム戦争以前は物々交換が主流であったが，現在は貨幣経済が多くの地域で浸透している。宗教は，アニミズム的な精霊（*yang*）信仰の他，コントゥム市周辺や国道沿いの村落ではカトリックやプロテスタントが普及している[10)]。

棟高が高く，屋根が大きく，装飾に凝ったバナ族のニャーロンは，テレビや新聞など様々なメディアでベトナム中部高原を象徴する伝統文化として紹介されている。バナ族にとって，ニャーロンとは村落の魂である。ニャーロンがない村落は，未だ村落足り得ていないという意味で「女性の村落」であり，魂のない家の集合体に過ぎない（Nguyên Ngọc 2007: 40）とさえ言われる。またバナ族は，威信財であるゴング（銅鑼）を重要な儀礼・祭礼の際に演奏する。ニャーロンの落成式が，バナ族のゴング演奏機会として多く挙げられた（柳沢 2009: 69, 70）ことからも，ニャーロンはバナ族にとっ

て重要な意義を持つと考えることができる。

筆者が訪れたコントゥム省内のバナ族 45 村落のうち，36 村落でニャーロンの存在が確認できた（建築・補修中のニャーロンを含む）[11]。ニャーロンの存在が確認できたバナ族村落は，コントゥム省コントゥム市内が 33 村中 27 村，コントゥム省コンゼイ県内が 8 村中 6 村，コントゥム省ダクハ県内が 3 村中 3 村，コントゥム省サータイ県内が 1 村中 0 村である。なおコントゥム市内の 5 村，コンゼイ県内の 2 村，サータイ県内の 1 村では，ニャーロンの有無を確認することができなかった。従って，訪れたバナ族の村落で，ニャーロンが存在しないことを確認したのは，コントゥム市内の 1 村のみである。

筆者が訪れたバナ族 36 村落のニャーロンのうち，32 村落が草葺き屋根の伝統的なニャーロンであり，トタン屋根の近代的なニャーロンは 4 村落のみであった。またニャーロンの建築年が確認できた 15 村落のうち，11 村落のニャーロンは 2005 年以降に建築（補修，建て替えを含む）されており，比較的最近に建てられたニャーロンが多いことも分かった。

かつてほとんど全ての少数民族村落には，ニャーロンが最低でも 1 つは存在していたとされるが，度重なる戦争による文化の断絶と，生活の近代化などにより，ニャーロンの数は減少した（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 51）。Phạm Cao Đạt（2002: 20）によれば，1999 年 7 月の時点で，調査を行ったコントゥム省の全 625 村落のうち，42.4％の 265 村にニャーロンが存在していた。1999 年 9 月，コントゥム省文化情報局（現コントゥム省文化スポーツ観光局）は，「ニャーロン――ニャーロン文化の現状と解決策」と題する会議を開催した。その会議の結論に基づき，同年 11 月 25 日にはコントゥム省人民委員会より「コントゥム省の少数民族の伝統的なニャーロンの保護と回復」の指示（21/CT-UB）が通達された（A Đôi 2002: 1）。その後，コントゥム省文化情報局により伝統的なニャーロンの建築・建て替えが積極的に進められ，2002 年の初頭において省内のニャーロンの総数が 265 から 321 に増加，さらに 2002 年 12 月には 381 に増加した（A Đôi 2002: 1）。このように，コントゥム省では，草葺き屋根の伝統的なニャーロンの建築・改修が政府により奨励されており，伝統的なニャーロンの増加に繋がっていると考えられる。

バナ族には，ロンガオ（Rơ Ngao），ジョロン（Jơ Lơng），トロー（Tơ Lô），コントゥム（Kon Tum）など居住する地域ごとにサブグループがあり，サブグループごとにニャーロンの形態的特徴が異なることも分かった。例えば，ロンガオとは，バナ族とセダン族の混血により生まれたサブグループであり[12]，コントゥム省コントゥム市

内，ダクハ県などに居住しているが，そのニャーロンは，棟高が高く，切妻屋根は上方に大きく湾曲し，屋根上の装飾なども凝ったものが多い（写真 1, 2）[13]。屋根上の装飾は，三日月や太陽，鳥や鶏などがモチーフとして用いられ（写真 3），ニャーロン内部は広々としており，軽やかで流れるような外観にも特徴がある（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 61, 62）。

また主にコントゥム市内に居住するバナ族コントゥムグループもロンガオグループと同様，棟高が高く，屋根が大きく湾曲したニャーロンを建築する傾向が見られた。一方，バナ族ゾロングループは，主にコントゥム省コンゼイ県，コンプロン（Kon Plông）県に居住しているが，そのニャーロンは横長で，棟高は低く，屋根は湾曲しておらず，屋根上の装飾などもあまり見られなかった。またゾロングループのニャーロンには平側に出入口がなく，妻側に出入口があるものが多く見られた。

バナ族のニャーロン内部には，威信財である古壺，ニャーロンの落成式の際に使用された儀礼柱や供犠された水牛の頭骨，水牛を儀礼柱に縛っていた綱，そして儀礼・祭礼の際に用いられる太鼓などの楽器が保管・展示されていることがあった。また筆者が訪れたバナ族のニャーロンの床材には木材が用いられていることが多かった。

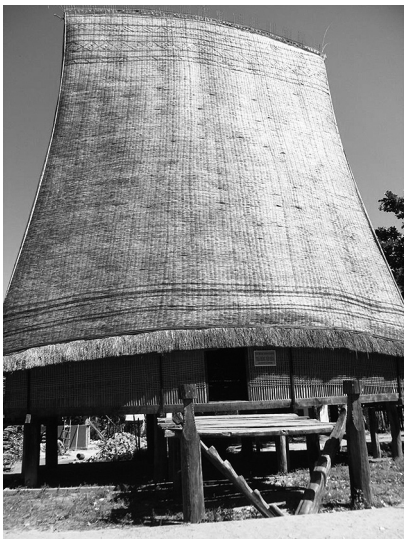

写真 1　バナ族ロンガオグループのニャーロン（2008 年 1 月 21 日，コンカトゥ村で筆者撮影）

写真 2　バナ族ロンガオグループのニャーロン側面（2010 年 12 月 4 日，コンゾーバン村で筆者撮影）

写真 3　バナ族ロンガオグループのニャーロンの屋根上部の装飾（2010 年 12 月 26 日，コンジョリー村で筆者撮影）

2.3.2　ジャライ族のニャーロン

ジャライ族は，マレー・ポリネシア語派（オーストロネシア語族）に属し，ベトナムにおける人口が 317,667 人（1999 年の政府統計）で，中部高原最大の少数民族である。ジャライ族は，最も古くより中部高原に居住していた先住民族の 1 つと考えられ，現在は主にジャライ省に居住し，コントゥム省西部やダクラク（Đắc Lắc）省北部にも一部が居住している。ジャライ族には，アラップ（Aráp），フドゥルン（Hđrung），トブアン（Tobuan），チョール（Chor），ムトゥール（Mthur）といったサブグループが存在するが，このうちニャーロンがあるのは，アラップ，フドゥルン，トブアンの村落である（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 199）。

筆者が訪れたコントゥム省，ジャライ省のジャライ族 30 村落のうち，17 村落でニャーロンの存在が確認できた。ニャーロンの存在が確認できたジャライ族の村落は，ジャライ省チュパ県内が 15 村中 8 村，コントゥム省コントゥム市内が 8 村中 4 村，ジャライ省プレイク市内が 3 村中 2 村，コントゥム省サータイ県内が 2 村中 2 村，ジャライ省クロンパ県内が 2 村中 1 村である。チュパ県内の 7 村，コントゥム市内の 4 村，クロンパ県内の 1 村ではニャーロンの有無が確認できなかった。ニャーロンの存在が確認できたジャライ族の 17 村落のうち，トタン屋根の近代的なニャーロン（写真 4）が建てられていたのは 13 村落で，その全てがジャライ省にあった。また伝統的なニャーロンが建てられていたのは 3 村落であり，その全てがコントゥム省にあった。コントゥム省の 1 村はニャーロンが建築中であった。ニャーロンが存在しないことを確認したのは，ジャライ省プレイク市内の 1 村のみであった。

筆者が訪れたジャライ族のニャーロンは，バナ族のニャーロンに比べて小型で，棟

写真 4　ジャライ族の近代的なニャーロン（2010 年 12 月 9 日，プレイケプ村で筆者撮影）

写真 5　ニャーロンの屋根上の装飾（2010 年 12 月 9 日，プレイケプ村で筆者撮影）

高も低いものが多かった。Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng（2007: 199）によれば，ジャライ族のニャーロンの特徴として，屋根の両端にはゾーゾン（rau dớn）と呼ばれる植物のシンボル（写真 5）が飾られている点が挙げられる。またニャーロン平側中央出入口の露台に建てられた一対の柱の上部は，ひょうたん，牛の角，銅鍋，小さな甕，壺などをモチーフにした彫刻が彫られることが多い（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 200）。筆者の観察したニャーロンでは，露台に上がる際に足場として使うため立て掛けられている一対の木製の階段に男女のモチーフが彫られているものもあった。

写真 6　ニャーロンの屋根上の装飾（2010 年 12 月 1 日，ヤンバー村で筆者撮影）

近代的なニャーロンは，屋根がトタンで柱や土台などの基礎がコンクリートのもの，屋根はトタンだが柱などは木造のものなど様々なバリエーションがあることが分かった。また近代的なニャーロンも，伝統的なニャーロンと同様に内部の壁材や床材は木材が使われていることが多かった。トタン屋根の色や形状は村ごとに様々であり，屋根上の装飾には各民族の伝統的なモチーフや村名，ニャーロンの落成年月日などが彫られていることもあった（写真 6）。

2.3.3　セダン族のニャーロン

セダン族は，モン・クメール語派に属し，ベトナムにおける人口が 127,148 人（1999 年の政府統計）である。主にコントゥム省に居住し，クアンナム（Quảng Nam）省やクアンガイ（Quảng Ngãi）省にも一部が居住している。筆者が訪れたコントゥム省におけるセダン族の 12 村落全てでニャーロンの存在が確認できた。訪れたセダン族の 12 村落は，コントゥム省ンゴックホイ県内が 5 村，コントゥム省ダクハ県内が 4 村，コントゥム省サータイ県内が 2 村，コントゥム省コントゥム市内が 1 村である。12 村落のニャーロンのうち，草葺き屋根の伝統的なニャーロンは 8 村，トタン屋根の近代的なニャーロンは 4 村である。

セダン族のニャーロンの特徴として，例えば，コントゥム省ダクハ県ンゴックゼオ（Ngọc Réo）社に居住するセダン族トジャー（Tơ Drá）グループの場合，伝統的なニャーロンが多く見られた。棟高はバナ族のニャーロンに比べると低いことが多く，また草葺き屋根は湾曲していないため屋根上部の三角形の角度がより大きく，地面から床までの高さも低いものが多かった（写真 7）[14]。伝統的なニャーロンの屋根の両端にはゾーゾンと呼ばれる植物のシンボルが飾られているものが多く見られた。伝統的なニャーロンの内部は，床材が木材ではなく，竹材が使われていているものが多かった（写真 8）。またコントゥム省ンゴックホイ県に居住するセダン族カヨン

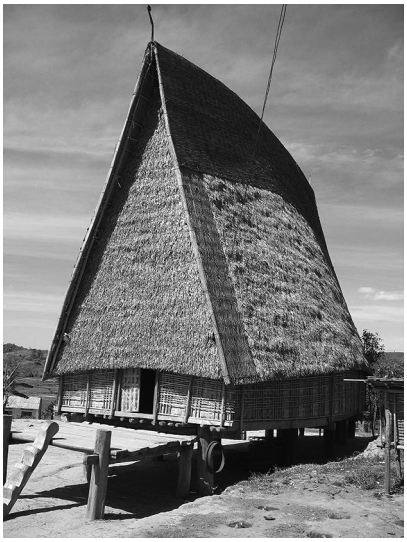

写真 7　セダン族トジャーグループのニャーロン（2007 年 1 月 13 日，コンゾック村で筆者撮影）

写真 8　セダン族トジャーグループのニャーロン内部（2007 年 1 月 13 日，コンゾック村で筆者撮影）

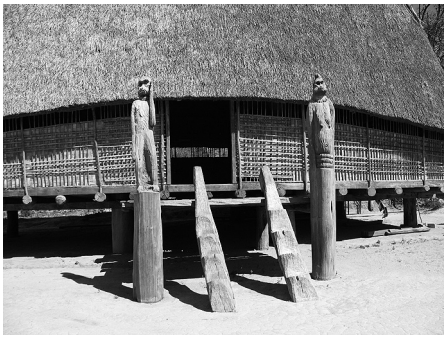

写真 9　セダン族カヨングループのニャーロン（2007 年 1 月 13 日，コンゼー村で筆者撮影）

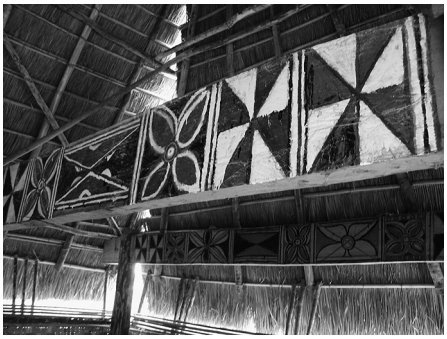

写真 10　セダン族カヨングループのニャーロン内部の梁（2007 年 1 月 6 日，コンコン村で筆者撮影）

（Cadong）グループのニャーロンには，平側中央出入口の露台の柱の上部に男女の彫像が彫られており（写真 9），内部の梁や柱などに伝統的な絵や幾何学模様が描かれていた（写真 10）。

またセダン族のア・ヤー氏（58 歳，ニャーロン文化に詳しい人物）によれば，セダン族のニャーロンには「男性のニャーロン（セダン語で *kot làng rét*）」と「女性のニャーロン（*kot upò*）」の 2 種類があり，前者は地面から床までの高さ（床高）が高

写真 11　ゼチエン族ゼグループのニャーロン（2010 年 12 月 29 日，ノンコン村で筆者撮影）

写真 12　ゼチエン族ゼグループのニャーロン内部（2010 年 12 月 29 日，ノンコン村で筆者撮影）

いニャーロンのことを指し，後者は地面から床までの高さが低いニャーロンのことを指すという。ニャーロン建築の際に木材などの十分な建材が手に入った場合，男性のニャーロンを建てるが，そうでない場合は女性のニャーロンを建てるのだという。

2.3.4　ゼチエン族のニャーロン

ゼチエン族は，モン・クメール語派に属し，ベトナムにおける人口が 30,234 人（1999 年の政府統計）である。主にクアンナム省のザーン（Giằng）県とフオックソン（Phước Sơn）県，コントゥム省のンゴックホイ県，ダクグレイ（Đắc Glei）県などに居住している。筆者が訪れたコントゥム省ンゴックホイ県内のゼチエン族の 5 村落のうち，4 村落でニャーロンの存在が確認できた。1 村落は，2009 年に火事でニャーロンが焼失してしまったため，訪問当時ニャーロンはなかった。

4 村落のニャーロンは，全て草葺き屋根の伝統的なニャーロンであった。筆者が訪れたゼチエン族のニャーロンは，バナ族，セダン族，ジャライ族のニャーロンに比べて棟高が低く，奥行きも狭いものが多かった。ニャーロンの外観に共通する特徴として，草葺き屋根が亀の甲羅のような形状で（写真 11），屋根の両端には水牛の角を模した彫刻が見られた[15]。ニャーロンの出入口は平側にはなく，妻側に 2 カ所あった。またニャーロン内部に共通する特徴として，落成式で供犠された水牛の頭骨（あるいは頭骨を模した彫刻）が出入口の上部に掲げられており，白，黒，赤の幾何学模様が施された梁の上部に，儀礼・祭礼で使う細長い太鼓が保管されていた点などが挙げられる（写真 12）。

3　ニャーロンの構造

3.1　ニャーロンの建築

次に，現地での聞き取り調査で得たデータをもとに伝統的なニャーロンの建築工程について説明する。主なインフォーマントは，バナ族ロンガオグループのコンモーネイカトゥモット村（コントゥム省コントゥム市）のニャーロン建築に中心的な役割を担ったア・ンゲオ氏（55 歳，村の長老）である。

筆者が訪れたバナ族，ジャライ族，セダン族の伝統的なニャーロンは，多くが総掘立柱の合掌造であった。伝統的なニャーロンの建築では，まず建築に使用する木材を集めるところから始まる。通常，各村落に近い森林から（数十 km 離れている場合もある），大勢の村人が協力して木材を伐り出し，人力，牛車，あるいはトラックなどの自動車を使い，村落内の建築現場に運ぶ。伝統的なニャーロンの建築部材は全て森林から得られる。しかし，近年は森林の減少などにより建材に使用する木材が十分に確保できないことも多く，伝統的なニャーロンでも，構造材の一部にコンクリートや鉄などが使われたりすることがある。

基礎となる掘立柱には，通常 8 ～ 12 本の大きな丸太が必要である（写真 13）。柱に使う木材は，直径が大きく，長さが長く，長期の利用に耐えられる丈夫な樹種を使う必要がある。たとえば，タマリンド（cây me，学名：*Tamarindus indica*）やカチットの木（gỗ cà chít，学名：*Shorea Roxburghii*）などが柱に使用される。しかし，1975 年以降，政府の定住化政策により多くのキン族が平地から中部高原に移住すると，森林伐採が急速に進み，ニャーロンの建築に必要な木材（特に柱などに使う太く長い木材）が村落の近くでは手に入らなくなり，大金を支払って遠くから購入しなければならなくなった（Salemink 2003: 273）。Tuổi Trẻ（2011）によれば，2011 年 6 月に完成したコンクロー村（コントゥム市内）のニャーロン（棟高 22 m，間口 17.2 m で中部高原最大）は，カイソアイ（cây xoay）という鉄のように硬く，中部高原の厳しい気候や反り，白アリに耐えることができる貴重な丸太 12 本を柱として使用した。しかし，コントゥム省内では柱や垂木に使うことのできる十分な木材が確保できなかったため，コントゥム市内のある会社が国境を接するラオスから丸太を運んで，村に提供した。

バナ族のニャーロンには，数百本におよぶカチットの木材が，柱，梁，屋根の垂木，

床板などに用いられる（Vũ Khánh 2007: 30）。床材には例えば，ロオー（cây lồ ô，学名：*Bambusa procera*）というタケを割いたものが，壁材にはヌア（cây nứa，学名：*Bambusa textilis McClure*）というタケを割いたものなどが用いられる。伝統的なニャーロンの屋根は，草葺きの切妻造である。屋根を葺くための草には通常，チガヤ（cỏ tranh，学名：*Imperata cylindrica*）やラタン（cây mây，学名：*Calameae Kunth ex Lecoq & Juillet*）の葉を乾燥させたものが用いられるが，その総重量は 1 t にもなるという（写真 14）。バナ族の伝統的なニャーロンでは，木舞竹にチガヤを束ねて二段にしたパネルを結び付けて屋根を葺き，軒先を切り揃える（佐藤 2011: 48）。バナ族ロンガオグループのア・ジャー氏（64 歳，プレイドン村村長）によれば，ニャーロンの屋根は 4 面（長辺側の 2 面と短辺側の 2 面）からなり，斧の刃を天に向かって上向きにしたような形状で，草で葺かれていなければならない。ニャーロンの屋根を葺く作業は，主に身軽な若者の仕事である。屋根を葺く作業は高所での作業になるため，大変な危険を伴う。しかし，筆者が観察した限り，作業者の多くはヘルメットや安全帯の着用なしで作業を行っており，十分な安全対策が講じられているようには見えなかった（写真 15）。

各木材は部材同士の接合部がうまく嵌るように専門の職人が斧，ナイフ，鋸，鉋などを用いて慎重に加工する。Nguyễn Khắc Tụng và Nguyễn Hồng Giáp（1991: 90–91）によれば，ニャーロンの建材の加工には，長さや大きさの異なる複数の斧やナイフ，鉈などが用いられる。伝統的なニャーロンの場合，部材同士の接合部を組み合わせた後，皮籐（ラタンの表皮を一定の幅と厚みに挽いたひも状のもの）で木材同士を括り固定する（小林・飯塚 2010: 1681）。また彫刻職人が，ニャーロンの屋根上部につける鳥，石弓，鎌，稲，太陽などをモチーフにした金属・竹・木製の屋根飾りを作る。その装飾は，民族ごと村ごとに様式が異なる独自のものである。しかし，近年はこうした装飾を作ることのできる職人の数が少なくなっているという。

伝統的なニャーロンの建築は，村落の男性がそれぞれ得意な役割を分担して総出で行う。建築期間は，通常 3 カ月から 6 カ月ほどであるが，長い時には 1 年以上かかる場合もある。建築費用は基本的に各世帯が拠出するが[16]，近年では，政府による経済的な支援がある場合もある。コンモーネイカトゥモット村の場合，1 日当たり約 100 人の男がニャーロンの建築に携わり，完成までに 1 カ月以上かかった。また村内の全世帯（89 世帯）から 5 万ドン（約 200 円）[17] が供出されたほか，建築費用として 12 世帯が 50 万ドン（約 2,000 円）支払った。さらに建築費用と落成式の費用の足しにするため，村が所有している土地の一部を 250 万ドン（約 1 万円）で売却した。建築

写真 13　ニャーロンの柱に使われる木材（2010 年 12 月 3 日, コンクロー村で筆者撮影）

写真 14　ニャーロンの屋根を葺くのに使われる草（2007 年 1 月 13 日，コンボーバン村で筆者撮影）

写真 15　ニャーロンの建築作業（2007 年 2 月 26 日，プレイクラウンゴルゾー村で筆者撮影）

費の総額は，ニャーロンの規模や建材となる木材などの入手状況などにより異なるが，1997 年に完成したコンジョリー村（バナ族ロンガオグループ）のニャーロンの場合，約 8,000 万ドン（約 30 万円）であった（Dương Tôn Bảo 2002: 115）。

3.2　ニャーロンの外観・内部

ニャーロンは，村落毎にその大きさや形状が異なるが，筆者が測定したバナ族ロンガオグループの伝統的なニャーロンは，間口が 11 ～ 13 m，奥行きが 5 ～ 8 m，棟高

が 11 ～ 20 m，地面から床までの高さが 1.5 ～ 2 m 程度であった[18]。ニャーロンの出入口は，バナ族ロンガオグループの場合，平側中央に 1 つ，妻側の両方あるいは正面向かって右側に 1 つあることが多い。通常，平側の出入口の方が大きく，妻側の出入口はやや小さい。平側出入口には，幅・奥行き 3 ～ 4 m 程度の露台が，妻側出入口には平側出入口より小さめの露台が設けられていることが多い。露台の左右には 2 ～ 3 m 程度の掘立柱が立ち，露台から地面に向けて丸太を削って作られた階段が 1 本又は 2 本掛けられている（写真 16）。例えば，バナ族ロンガオグループのコンモーネイカトゥモット村のニャーロンの場合（図 3），間口が 12.5 m，奥行きが 6.3 m，平側中央の出入口は幅 1.22 m，高さ 1.67 m，妻側の出入口は幅 1 m，高さ 1.37 m，平側出入口の露台が，幅 4.1 m，奥行き 3.8 m，露台に掛けられた階段の全長が 3.7 m，露台の左右にある掘立柱の高さは 2.6 m であった。また平側出入口は西向き（274 度），妻側出入口は南向き（178 度）であった。

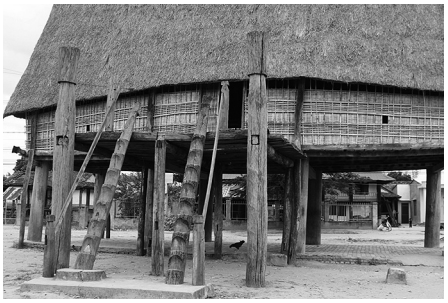

写真 16　ニャーロン出入口の露台の柱と階段（2010 年 12 月 4 日，コンローバン村で筆者撮影）

写真 17　バナ族ニャーロン内部の竹編みの扉と壁（2010 年 12 月 6 日，コンゾーラン村で筆者撮影）

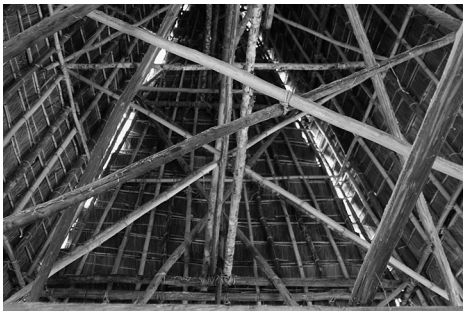

写真 18　ニャーロンの屋根を支える木製支柱（2010 年 12 月 6 日，コンジョゼープラン村で筆者撮影）

写真 19　バナ族のニャーロン内部，右下に見えるのが炉（2006 年 4 月 1 日，コンカトゥ村で筆者撮影）

伝統的なニャーロン内部は，多くの場合，居室が区切られていない 1 つの大きな空間で，天井が高く開放感のある造りになっている。また，ニャーロン内部は窓がないため日中でも薄暗いが，壁および出入口の扉は竹編みで，その隙間や開口部から風や日光が入るようになっている（写真 17）。天井には屋根を支える多数の木製支柱が交差している（写真 18）。ニャーロン内部には，床下から伸びる側柱が間口と並行に 2 列× 4 本平行に立っており（床面から先端までの高さは 2.5 ～ 3 m 程度），柱の上部には大きな梁が各 4 本掛けられている。床は幅広の板張りあるいは割り竹を目透かしに結んだもので，内部架構は折置組，化粧屋根裏である（佐藤 2011: 48）。ニャーロン内部は，中央部で柱と平行に区切られていることがあるが，これはかつて祭礼の際に多数の壺酒を固定して飲む際に使われていた名残と考えられる（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 61）。またバナ族ゾロングループの村落で，ニャーロン内部中央に間仕切りがある事例が見られたが，これは祭礼の際に男女のスペースを分けるためであるという。

幾つかのバナ族のニャーロン内には，暖を取るための 1 m 角の炉が見られた（写真 19）。また集会や教室として使う際の机や椅子などが置かれていることもあった。また古壺や銅鑼，太鼓など村の共有財産が保管されていたり，ニャーロンの落成式の際に供犠された水牛の頭骨や供犠する水牛を繋いでいた綱などの道具類が，竹製の作り

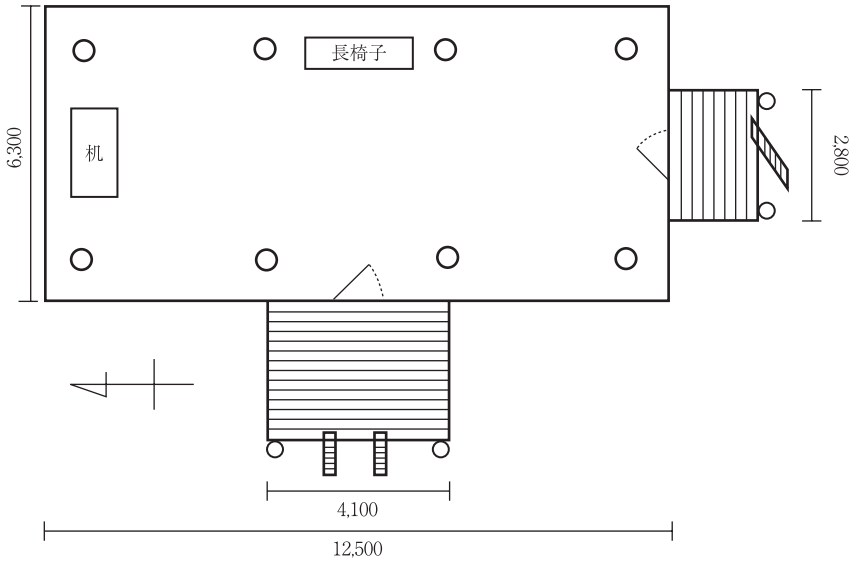

図 3　バナ族ロンガオグループのニャーロン平面図（単位：mm，コンモーネイカトゥモット村の事例）

付けの棚に配置されている事もあった。

3.3　近代的なニャーロン

近年，草葺き屋根の伝統的なニャーロンに加えて，トタン屋根とガラス窓を採用し，柱，土台などの構造材にコンクリートを用いた近代的なニャーロンが増えている（写真 20）。近代的なニャーロンは，1975 年以降にコントゥム省，ジャライ省で建てられ始め（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 52），先述したようにジャライ族の村落に比較的多く見られる。近代的なニャーロンは，キン族の建築家や建築会社など村落の外部者によって建てられたものもあり，その場合，赤や緑の波板のトタン屋根を脈絡なく用いるなど，各村落の伝統的な意匠と関係のないデザインを採用していることがある（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 52–53）。また近代的なニャーロンは，伝統的なニャーロンに比べて小さく，建築面積は 50 平方メートル以下，棟高は最大でも 10 m ほどで，地面から床までの高さも 1.5 m 程度と低いものが多い（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 53）。

近代的なニャーロンが増えている理由は，第一に木材，ラタン，竹など，ニャーロンの建築に用いる森林資源が不足しているからである[19]。また経済的に貧しい村の場合，ニャーロンを建てるのに必要な資金が足りないため，政府の援助によりトタン屋根の近代的なニャーロンを建てることもある。1990 年代初頭以降，中部高原の北部，

写真 20　ジャライ族の近代的なニャーロン：左が古いニャーロン，右が建築中の新しいニャーロン（2010 年 12 月 1 日，ヤンバー村で筆者撮影）

特にジャライ省では，省の文化情報局の指示の下，村落活動の拠点とするべく多くのニャーロンが建てられた（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 52）。ジャライ省政府の支援により建てられたこれらのニャーロンには，近代的な建築様式のニャーロンが多く含まれていたと考えられる。このように近代的なニャーロンの増加には，省政府による村落活動への積極的な関与が背景にあるものと推測される。

草葺き屋根の伝統的なニャーロンは風雨に弱いため壊れやすく，通常，5 年から 7 年に一度は修理をする必要がある（Phạm Cao Đạt. 2002: 32）。また修復には多くの時間と労力，費用がかかる。聞き取り調査によれば，伝統的なニャーロンは，火事により全焼してしまうことも珍しくないという[20]。一方，トタン屋根で，コンクリートや木材，鋼材などを構造材に用いる近代的なニャーロンは頑強で壊れにくく，また壊れても修復が容易である。すなわち耐久性，防火性の点からすると，近代的なニャーロンに分がある。しかし，村落の外部者によって建てられた近代的なニャーロンが普及すれば，民族ごと，村落ごとに異なる多様な建築様式・意匠の伝統が失われていく可能性も否定できない。

4　ニャーロンの役割

次に，ニャーロンの役割について，主に現地での観察，聞き取り調査で得た情報をもとに，社会的役割，政治的役割，文化的役割の 3 つに分けて考察する[21]。先行研究では，20 世紀中頃までのニャーロンの役割として，①来客用宿泊施設，②会議場，③未婚の男や妻を亡くした男のための寮，④学校，⑤行政機関，⑥工芸品などの生産拠点，⑦戦時中の司令本部，⑧（酒を飲み，音楽や踊りを楽しむ）クラブ，⑨文化伝承の場，⑩宗教施設，⑪コミュニティ・センターの 11 点が挙げられている（Nguyễn Khắc Tụng và Nguyễn Hồng Giáp 1991: 97–149; Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 50）。以下，上記の役割がどのように残っているのか，聞き取り調査を行ったバナ族，セダン族の事例をもとに考察する。

4.1　社会的役割

バナ族プレイドン村村長のア・ジャー氏によれば，ニャーロンは現在，老若男女誰でも入室することができ，村人が集まって，おしゃべりをしたり，くつろいだり，楽器を演奏したり，村落の団らんの場として使用される。かつて，女性がニャーロンへ入ることは多くの民族グループの慣習として禁じられていたが，現在ではそうした慣

習もめったに見られない（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 54）。一方，ジャライ省マンヤン郡では，「男女とも入れる」，「男性のみ入れる」，「女性は入れるが，居所が（外側と呼ばれる）半分のみ」，「女性も入れるが後ほど長老が金銭・お酒を集落に寄付する条件付き」など，各集落によってニャーロンの使用規則が異なる（国際協力機構 2009: 3）という報告もある。

ニャーロンは，未婚の男子が寝泊まりする場でもある。従って，彼らが寝泊まりする際に使う寝具などが置かれていたりすることも多い。実際，筆者が訪問した多くのニャーロンには毛布が置かれていた。Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng（2007: 54）によれば，多くの村落では，現在もニャーロンで未婚の男子が寝泊まりする習慣があるが，昔のような通過儀礼的な性質はなくなり，一貫性なく行われている。またかつてニャーロンは，村落外から訪問者が来たときに応接する場でもあった。即ち，村落の代表者が村落の外部から来た人間とコミュニケーションを取る場であった（Nguyên Ngọc 2007: 41）。バナ族ロンガオグループのコングン村では，現在もニャーロンが外部者を応接する場として使用されているという。ニャーロンは近隣に学校がない場合，あるいは一時的に校舎が使用できない場合などに，現在でも教室代わりに使用されることがある。その場合，ニャーロン内には，黒板や机，椅子などが配置されていた。

筆者が訪問したニャーロン内には電気が引かれている事例もあり，室内に設置されたテレビやステレオの音楽を若者が視聴していたりすることもあった。このようなニャーロンは，「文化的なニャーロン」（nhà rông văn hóa）と呼ばれ，伝統的なしきたりが重要視されなくなっている（Phạm Cao Đạt 2002: 29）という指摘もある。また，筆者が訪れたニャーロン内部には，ベトナム民主共和国初代主席のホー・チ・ミンが描かれた絵やホー・チ・ミンの胸像，ベトナム国旗，プロパガンダのポスター，カレンダー，省や県の人民委員会からの「文化的むら」[22] の認定証（bằng công nhận làng vân hóa）や各種褒状などが飾られていることが多かった。Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng（2007: 53）によれば，これらは近年見られるようになった変化であるという。焼畑移動耕作から水稲耕作，換金作物栽培への転換といった生業の変化に加えて，キリスト教や外国のポップカルチャーの普及，さらには，各家庭にテレビ，VCD プレーヤー，扇風機，携帯電話，オートバイなどの電気製品が普及するなど，少数民族の生活スタイルは急速に変化しつつある。ニャーロン内部の変化は，政府の国民統合政策，文化政策，および，市場経済化以後，急速に変化しつつある村人の生活スタイルを反映したものであると考えられる。

以上より，ニャーロンは，来客用宿泊施設（①）として現在も使用されているのかは分からなかったが，一部の村落では，訪問者を応接する場として使われていることが分かった。また，未婚の男子が寝泊まりする寮（③），学校（④）の代替校舎としての役割が現在もあることが分かった。ただし，ここでいう「学校」とは，ベトナム語による「近代的」な学校教育の場としての「学校」であり，ベトナム戦争以前の「伝統的」な知識・慣習を若い世代に教える「学校」としての役割は既に無くなっていると考えられる。またおしゃべりをしたり，くつろいだり，人々が集まって交流する場という意味でのコミュニティ・センター（⑪）としての役割は，現在も残っていることが分かった。

4.2　政治的役割

ニャーロンは第一に村落の集会所としての役割がある。ベトナム戦争以前，ニャーロンは村落の行政を行う中心的な場であったが，現在は，政府の人民委員会が村落の行政を担っているため，そうした役割も薄れていると考えられる[23)]。しかし，ニャーロンは，村落の長老による会議が行われる場として，村のルール（掟）を決める際や，村落内で問題が起きた時など重要な話し合いの際などに現在も使用される。不倫，窃盗，喧嘩など，村落内で様々ないさかいが起きた際に，当事者をニャーロンに呼んで話を聞き，村の長老 4 名（通常 1 人がチーフ，3 人が補佐）で構成される長老会議において解決策が検討される。その際には，村の慣習法（luật làng）が適用される。

中部高原における慣習法は通常，村落内におけるもめごと，例えば，夫婦の不和，村人同士の喧嘩などを仲裁するのに適用される。従って，不法侵入，放火，傷害，殺人などの重大な犯罪については，国家の法律によって裁かれる（Ngô Đức Thịnh 2007: 243）。例えば，バナ族のコンチャンモネイ村の場合，次のような規定がある。1. 不倫の場合は，通常 20 万ドンの罰金を配偶者に支払う。2. 窃盗の場合は，盗んだ品物を倍にして返す。3. 喧嘩は，それほど深刻なものでなければ，当事者同士で話し合いをさせ，怪我をさせた方が治療費を支払う。夫婦喧嘩の場合は，仲裁した長老に 10 万ドンから 50 万ドンを支払う。

以上より，ニャーロンは依然として村落内部の関係調整が行われ，問題を話し合い，解決する会議場（②）としての役割を担っているが，政府の行政機関が村落を管理している現在，村落の行政機関（⑤）としての役割は小さくなっていると考えられる。また工芸品などの生産拠点（⑥）として現在もニャーロンが使用されているのかは分からなかった。またかつてあったとされる集落間・民族間の争いが現在は無くなった

ため，戦時中の司令本部（⑦）としての役割は失われていることが分かった。

4.3　文化的役割

ニャーロンは，現在も村落の儀礼・祭礼が行われる神聖な場である。例えば，バナ族ロンガオグループは，水資源感謝祭（lễ nước giọt）を 12 月に行い，セダン族ソジャーグループは，米の収穫祭（lễ suối lúa đại trà）を 11 月に行う（Phạm Cao Đạt 2004: 122）。儀礼・祭礼の際には，ニャーロン内そしてニャーロン前の広場に，老若男女が集まり，多数の壺酒や料理が振る舞われる。またニャーロンの落成式など重要な儀礼・祭礼の際には，ニャーロン前の広場に儀礼柱（cột lễ）を立て，水牛供犠を伴う儀礼を行う。聞き取り調査によれば，バナ族の間では，ニャーロンには超自然的な力があると信じられており，ニャーロン内の精霊（*bok yang rông*）に供物を捧げる儀礼が行われていたが，現在ではこうした儀礼は行われていないという。またかつてニャーロンの使用に関して，様々なタブーが存在したが，現在ではほとんど見られないという。

バナ族の長老の説明によれば，大昔，ニャーロン内部にある精霊の柱（*d'răng lơ yang*）と呼ばれる柱の上には石が置かれていた。その石はバナ語でロモン（*domong*）と呼ばれ，それぞれの石には神が宿っていると考えられていたため，毎年，ヤギや豚を殺し，その血を石にかけ，村の安全と平和を祈願した。ただし，現在では多くのバナ族がカトリックを信仰していることもあり，ニャーロンに特別な力を認めておらず，そうした儀礼も行われなくなったという。

かつて，バナ族のニャーロンでは，夜になると炉を囲んで村落の年長者が村の伝承や叙事詩を語り，伝統楽器の演奏や歌などを若い世代に伝え聞かせるなど，文化伝承の場として用いられていた。ただし現在では，ニャーロン内部に炉がないものも多く，伝統文化に精通した年長者が少なくなり，若者も外国の文化により強い興味を示す傾向があるため，ニャーロンが文化伝承の場として使用される機会は少なくなっていると考えられる。ニャーロンは村の共有財産を保管・展示する倉庫でもあり，筆者が訪れたニャーロン内部には，儀礼で使う太鼓などの楽器類や水牛供犠儀礼の際に使う儀礼柱，供犠した水牛の頭骨，威信財・交換材でもある古壺，ゴングなどが保管・展示されていることがあった。またキリスト教を信仰するバナ族村落のニャーロンには，キリストの絵や像が祀られた簡易的な祭壇が設置されていることもあった。

以上より，現在伝統文化に精通した年長者が少なくなっており，文化伝承の場（⑨）としてのニャーロンの役割は，ベトナム戦争以前と比べると小さいと推測される[24)]。

またニャーロンには，伝統的な儀礼・祭礼を行う宗教施設（⑩）としての役割が現在もあることが分かった。キリスト教を信仰するバナ族の村落では，伝統的な儀礼・祭礼を行う場であるニャーロンと，キリスト教のミサ・祭典を行う場である教会が共存しており，それぞれが宗教施設としての役割を担っている。儀礼・祭礼の際以外に，ニャーロン内で楽器を演奏したり，踊りを踊ったり，壺酒を楽しむといったクラブ（⑧）としての役割が現在もあるのかは分からなかった。

5　ニャーロンの落成式

ニャーロンが完成（補修，改修を含む）すると落成式（lễ khánh thành nhà rông）が開催される。ニャーロンの落成式は，近隣の村からも大勢の参加者がある盛大な祝祭で，多くの壺酒や食事が振舞われる。また落成式では立派な雄の水牛が供犠され，青銅のゴングが演奏される。落成式は，通常ニャーロンの建築作業が終わって約 1 週間後に行われる。落成式は，満月の日に行われることが多いが，それは参加者が一晩中宴やダンスを楽しむことができるためである（Vũ Khánh 2007: 88）。バナ族ロンガオグループの長老ア・ンゲオ氏によれば，落成式は初日の午後から 2 日目の午後まで，2 日間かけて行われる。落成式で最も重要な水牛供犠の儀礼は，2 日目の早朝に行われる。水牛供犠の際には必ず青銅のゴングが演奏される。供犠された水牛の角や水牛が繋がれていた綱は，その後ニャーロン内で保管される。落成式が終了した次の日，村の長老らが集まり，ニャーロンの出来，不出来について検討会が行われる。

以下，2007 年 12 月 22 日にコンフラチョット（Kon Hra Chốt）村で行われたニャーロン落成式の行程を記述する。コンフラチョット村は，コントゥム省コントゥム市トンニャット区にあるバナ族の村落であり，キン族が居住するコントゥム市の市街地中心部から南に 2 km ほどのダクブラ川沿いにある。コントゥム市の総人口は 132,530 人（2004 年度統計）であり，コンフラチョット村の人口は不明であるが，コンフラチョット村が属するトンニャット区におけるバナ族の人口は 2,128 人（1999 年度統計）である。村人によれば，同村には長い間ニャーロンが無かったため，待望のニャーロン建築であった[25)]。同村の村人は，落成式に 1 人当たり 1 万ドン（約 40 円）のお金を支払った。ニャーロンの建築費用は政府による支援があったとのことだが，その金額や村人の拠出金との割合などは不明である。

7 時 30 分

コンフラチョット村のニャーロン（写真 21）前に筆者到着。広場中央には儀礼柱（cây nêu，バナ語で *gơl sa kpô*）が立てられ，大きな水牛が儀礼柱に太いロープで繋がれている（写真 22）。水牛は政府の支援（600 万ドン）によって購入したとのこと。ニャーロンには落成式らしく大きな緞帳が掛けられ，その前にある台の上にベトナム建国の父ホー・チ・ミンの胸像が置かれている。ニャーロンの下には原料の異なる数十の壷酒（rượu cần）が用意されている。各壺酒には竹製（一部ビニール製）のストローが差してある。広場の周囲には招待客が座る木製の長椅子と，プラスチック製の椅子が並んでいる。コンフラチョット村はコントゥムの市街地に近いので，バナ族だけでなく，街の有力者などキン族も招待されているようだ。ざっと見たところ 500 人以上の人が落成式に参加しているようである。

10 を超える壷酒と継ぎ足し用の水が入ったプラスチックの容器がニャーロン前に用意される。壺酒は，儀礼・祭礼の際には欠かせないが，その作り方や味は，同じ村落内でも各家庭によって異なり，各家庭で代々受け継がれている伝統文化である。各々の壷酒には竹片が壺の開口部に橋渡すように掛けられ，中央部の突起が水面に浸かっている[26]。ニャーロンの周囲にはカラフルな民族衣装を着た女性が待機しており，制服を着たキン族の警察官の姿もちらほら見える。警察官は，招待客として祭りに参加し，また騒乱が起きないよう監視してもいるのだろう。またジャーナリストらしきカメラを携えた男性が 3 人，ビデオカメラ（旧式のベータカムのよう）を担いだ地元テレビ局の人と思われる男性が 1 人来ていた。

8 時

広場に設置された PA 用のスピーカーから音楽が流れ，キン族の司会の男性が落成式の開始をアナウンスする。式は司会進行により決められたプログラム通りに行われるようで，政府（コントゥム省文化情報局）主導の式であることが分かる。まずカラフルな民族衣装を着た 8 人の若い女性がスピーカーから流れるコミカルな音楽に合わせて広場中央で踊り始める（写真 23）。踊りは小学生の学芸会といった趣である。顔立ちからしてバナ族であるようだが，コンフラチョット村の住人であるかどうかは定かでない。その後，民族衣装を着たバナ族の中年女性 3 人とバナ族の中年男性 1 人がマイクを使って歌を歌う。バナ語の歌詞と思われるが，曲は西洋音楽の影響が強く感じられた。その後，村の有力者と思しき人が入れ替わり立ち替わり演説し，時に歌を歌う。その後，テープカット，賞状・記念品の贈呈と続く。

9 時 40 分

槍や短刀などの武器を持った 4 人の男達，民族衣装を着た 10 人のゴング演奏者（男性，30 ～ 60 歳代）と大きな両面太鼓を担いだ奏者が 2 人（2 人で 1 つの大きな太鼓を担いでいる），40 人程の民族衣装を着た女性（10 ～ 40 歳代位）が儀礼柱の立つ広場に登場する。武器を持った男達は槍などで儀礼柱の周りを反時計回りに回りながら，儀礼柱に繋がれた水牛を威嚇する。ゴング演奏者は，儀礼柱の周りを同様に一列に反時計回りに回りながらゴングを演奏する。女性は手を繋いで，ゴング演奏者のさらに外周をゆっくりと踊りながら反時計周りに踊る。

演奏者，踊り手ともコンフラチョット村の住人のようだ。武器を持った男達は水牛を威嚇するが，あくまでパフォーマンスであり，実際に水牛を刺すことはしない（写真 24）。15 分もすると，武器を持った男達，ゴング演奏者，踊り手らは演技を終えたパフォーマーのように広場から退場した。そして「改良ゴングアンサンブル」[27] と呼ばれる吊りゴングを演奏するゴンググループが，ニャーロン横でゴングの演奏を始める。警察官や村・街の有力者などがニャーロン前に用意された壷酒を飲み，次々に記念撮影を行う。

再び女性の踊りが始まる。先ほどより多い 60 人ほどの民族衣装を着た女性が水牛のつながれた儀礼柱の回りを反時計回りに踊る。その後，人々は酒を飲み，肉や野菜，もち米の料理を食べ，歓談する。水牛の殺生は式が終わった後，観衆からは見えない場所でこっそりと行われたようである。水牛は解体され，その日の午後にコンフラチョット村の住人に分けられた。10 時半を過ぎると，焼き鳥や竹筒で蒸されたもち米などが振舞われ，ニャーロン周辺の至る所で宴会のような状態になっていた。

聞き取り調査や先行研究（Vũ Khánh 2007: 88–91 他）によれば，バナ族のニャーロン落成式では，水牛供犠（đâm trâu）を行い，儀礼柱に繋がれた雄の水牛を大勢の観衆の目の前で槍で刺して殺生する。しかし，今回の落成式では，村のカトリック神父がこうした儀礼を野蛮なものとして好まなかったため，水牛供犠はあくまでパフォーマンスとして行われたとのことである。また通常は 2 日間行われる落成式も 1 日のみで終了した。式自体も村人主導というより，コントゥム省政府主導の式典の色合いが濃く，キン族の司会進行により進められた。この点に関しては落成式が行われたコンフラチョット村がコントゥム市の市街地に近く，政府関係者を含む多くのキン族にとってアクセスが容易であったという地理的要因が大きいと考えられる[28]。

写真 21　コンフラチョット村ニャーロン

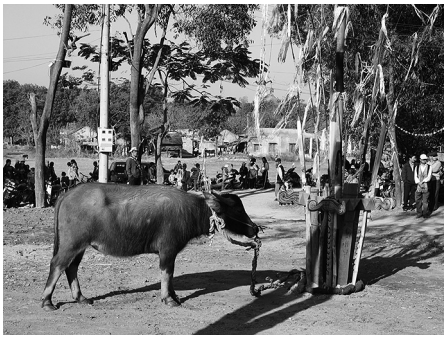

写真 22　儀礼柱に繋がれた水牛

写真 23　踊りを踊るバナ族の女性

写真 24　水牛を槍で威嚇するバナ族の男性

（写真 21 ～ 24　2007 年 12 月 22 日，コンフラチョット村で筆者撮影）

6　おわりに

本稿では，現地フィールド調査で得た民族誌的資料に基づき各民族のニャーロンの建築様式，および，ニャーロンの構造，役割，落成式などについて報告した。第 2 章では，調査を行った村落では，バナ族は草葺き屋根の伝統的なニャーロンが，ジャライ族はトタン屋根の近代的なニャーロンが主流となっていることなど，各民族のニャーロンの建築様式の傾向が明らかとなった。さらに，同じ民族でも地域ごとに異なるサブグループによってニャーロンの建築様式が異なることを示した。第 3 章では，伝統的なニャーロンの建築工程，ニャーロンの外観と内部の様子について説明し，近年増加している近代的なニャーロンとその増加の背景について考察した。第 4 章では，様々な社会変化を背景に，変わりつつあるニャーロンの役割や内部の様子について考察した。ニャーロンには現在も，未婚の男子が寝泊まりする寮，村落内の問題を

話し合う会議場，伝統的な儀礼・祭礼が行われる宗教施設としての役割などが残っていることが分かった。第 5 章では，バナ族のニャーロンの落成式について報告した。筆者が観察した落成式では，キン族の司会により式が進行し，水牛供犠がパフォーマンスとして行われるなど，外部からの影響を受けて儀礼内容に変化が起きていることが明らかになった。

調査を行ったバナ族の村落では，生活の近代化や生業の転換などを背景に，伝統的な精霊信仰に基づくニャーロンの神聖性が低下し，村人の信仰活動の中心的な場がニャーロンからキリスト教の教会へと移行しつつあると考えられる。それは先述したバナ族のニャーロン落成式において，キリスト教の神父が，伝統的な水牛供犠を「野蛮な行為」としてみなしたため，実際には行われなかったという事実にも表れている。またベトナム政府による近代的な行政システムが辺境地域の末端にまで及んでいる現在，ニャーロンが有していた村落の政治を執り行う場として役割も小さくなっていると考えられる。つまり，現在のニャーロンは，村落内の政治・行政を司る場，あるいは，儀礼・祭礼が行われる信仰・精神活動の中心的な場としてよりも，むしろ，各民族の「伝統文化」を象徴するシンボル的な役割が大きくなっているのではないか[29)]。

村落ごとに継承されてきた「ニャーロン文化」とでも言うべき伝統的なニャーロンの建築・意匠・儀礼・利用法などの知識・技術を有する職人・知識人の高齢化が進み，次世代への継承が多くの村落で危ぶまれている。生活の近代化，外国のポップカルチャーの普及などにより，若者がニャーロンに対してあまり興味を示さなくなりつつある現在，ニャーロン文化の継承は，各民族，各村落の文化を守る上で喫緊の課題であると考える。

かつて伝統的なニャーロンの建築は，村落内の全ての男性による共同作業であり，村落の絆を強化する役割があった。しかし，近代的なニャーロンが増加した現在，そうした役割も失われつつある（Asian Development Bank 2002: 22）。伝統的なニャーロンの建築材料となる森林資源の枯渇は大きな問題であり，今後は建築材料の調達が容易で頑丈な近代的なニャーロンの増加が予想される。先述したように，村落の外部者によって建てられ，村落の伝統的な意匠と関係のないデザインを採用した近代的なニャーロンが普及すれば，民族ごと，村落ごとに異なる多様な建築様式・意匠の伝統が失われる可能性は否定できない。しかし，一部の村落では，近代的なニャーロンにおいても，屋根飾りなどに民族，村落の伝統的なモチーフが施されているものがあった。こうしたニャーロンには，森林資源が十分に入手できない状況下でも，できる限

り美しいニャーロンを建てたいという村人の思いや創意工夫が現れていると言えるのではないだろうか。今後は，近代的なニャーロンに対する人々の嗜好・考えについても調査を行い，ニャーロン文化の展開を注視していきたい。

謝　　辞

本稿は，平成 21・22 年度日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号：09J04616）による研究成果の一部である。フィールド調査を手伝って頂いたボー・タイン・ロン氏，調査に協力していただいた少数民族の方々，貴重なコメントを頂いた 3 名の匿名の査読者に心よりお礼申し上げます。

注

1）　ベトナム語の地名，民族名，特定の名詞などの表記には，原則としてカタカナを用い，初出時にベトナム語を併記する。また少数民族言語による表記には，アルファベットのイタリック体を用いる。本稿で用いる各民族名は，1979 年にベトナム統計総局より公布された「ベトナム各民族成分一覧表」に定める国定民族 54 の中に数えられているものを用いる。
2）　現在のベトナムの地方行政制度は，1994 年に制定された組織法によって規定されており，地方行政単位は，基本的には省（tỉnh），県（huyện），社（xã）の 3 レベルからなり，「行政村」である社（xã）の下には，複数の自然村（làng，thôn）が含まれる（遠藤 2005: 164; 坪井 2008: 107）。本稿における「村」，「村落」とは，少数民族の地縁・血縁等に基づく村落共同体である自然村のことを指す。自然村は，プレイ（plei），コン（kon），ブン（bon 又は buôn）など地域ごとに異なる呼称がある。
3）　ニャーロンの観察・写真撮影は，調査期間の全体を通して行い，インタビュー，ニャーロンの計測は，2010 年 11 月～ 2011 年 2 月の調査の際に行った。
4）　ニャーロンは，ニャーラン（村落の家，nhà làng），ニャーコンドン（共同の家，nhà cộng đồng）と呼ばれることもある（Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng 2007: 46）。
5）　1 村落に 2 軒以上のニャーロンが存在する場合もあるが，稀である。
6）　バナ族のニャーロンを指す言葉として，フナムロン（*hnâm rông*）という呼称も使われる（Bùi Minh Đạo, Trần Hồng Thu và Bùi Bích Lan 2007: 162）。フナム（*hnâm*）はバナ語で「家」の意味である。
7）　本節は，Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng（2007: 45–47）を参照した。
8）　ニャーロン（nhà rông）のロン（rông）という語句は，モン・クメール語派に由来するという説がある（Chu Thái Sơn và Nguyễn Trường Giang 2005: 33）。
9）　バナ族，ジャライ族，セダン族，ゼチエン族の人口，居住地域，および，バナ族の生業などは，Bảo Tàng Dân Tộc Học Việt Nam（2006）を参照した。
10）　ベトナム中部高原におけるキリスト教の普及は，19 世紀中頃から始まるフランスのカトリック宣教団による先住山岳民族への布教活動から始まった（樫永 1999）。その後，1920 年代～ 60 年代にかけて平地から中部高原に移住してきたキン族，北部少数民族にカトリック教徒が多く含まれていたほか，ベトナム戦争後，社会主義政府による定住化政策の一環として行われた焼畑制限により，森や陸稲と結びついた祖霊・穀霊信仰を失った山岳少数民族にカトリックやプロテスタントが普及した（新江 2007: 102, 209）。
11）　ニャーロンの存在について事前に情報を得ていたのは 2 村のみで，その他の村落は事前の情報を得ずにランダムに訪れた。
12）　バナ族の村落付近に住むロンガオグループを Ba-Na Rơ Ngao（バナ族ロンガオグループ），セダン族の村落付近に住むロンガオグループを Xơ-Đăng Rơ Ngao（セダン族ロンガオグループ）と呼ぶことがある（Phạm Cao Đạt 2002: 19–20）。

13）Trần Khánh Lễ（2002: 88）に同様の指摘がある。
14）Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng（2007: 281）に同様の指摘がある。
15）Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng（2007: 235）に同様の指摘がある。
16）各村落の人口，世帯数は，村落ごとに大きく異なるが，筆者が調査を行ったバナ族，ジャライ族の村落の場合，1 村落あたりの人口はおよそ 400 ～ 800 人程度，世帯数は 100 世帯程度であった。
17）2012 年 2 月 22 日現在の為替レート（1 JPY = 264.842 VND）より，1 円≒ 250 ドンとして計算。以下同様。
18）コンモーネイカトゥモット村（コントゥム省コントゥム市），コングン村（コントゥム省ダクハ県），ダクムット村（コントゥム省ダクハ県）の 3 村のニャーロンを測定した。棟高については，撮影した写真から推測した。
19）ベトナム中部高原は，20 世紀中頃まで豊富な森林資源を有する地域であったが，ベトナム戦争での米軍による爆撃，枯葉剤散布などにより多くの森林が失われ，現在も木がほとんど生えていない山や丘が散見される。またベトナム戦争後，社会主義政府による中部高原への定住化政策の一環として，少数民族の焼畑移動耕作を制限し，コーヒーやゴムなどの商品作物の栽培へと転換が進められ，その過程で多くの森林が消失した（新江 2007: 213, 214）。また森林環境が悪化した多くの地域では，政府による森林保護化によって，木造建築に利用する資材の確保が難しくなっている（小林・飯塚 2010: 1679）。
20）コントゥム市中心部に近いコンクロー村では，2010 年 5 月 9 日に少年の火遊びが原因でニャーロンが全焼した（Tuổi Trẻ 2011）。
21）ニャーロンの役割の 3 分類については，村下・小林（2009: 647）を参考にした。
22）「文化的むら」公認制度とは，「文化」に関する一定の基準をクリアした集落を，年度ごとに「文化的むら」に「公認」するという制度のことである（加藤 2009: 23）。
23）省（tỉnh），県（huyện），社（xã）のそれぞれのレベルにおいて，議会の役割を担う人民評議会，行政機関である人民委員会，司法機関である人民裁判所と人民検察院が設置されている（遠藤 2005: 166）。
24）ただし，村下・小林（2009: 648）が指摘するように，ニャーロンには，伝統的な住文化の形態，建設および維持手法を後世に残すという建築そのものの持つ意義は残っている。
25）コンフラチョット村になぜニャーロンがなかったのか，以前にはあったが，損壊して再建築されなかったのかについては，聞き取りができなかった。
26）竹片の中央部の突起は，各人の飲む量を規定しており，水面が突起の先端より下がるまで飲まなければならない。飲み終わったら，水を壷の開口部に一杯になるまで注ぎ，次の人にストローを渡す。筆者の経験では，壷酒を飲む際は，用意された野菜や肉の脂身，臓物などで作ったつまみを食べつつ飲むと悪酔いしにくい。
27）改良ゴングアンサンブルについては，柳沢（2009）を参照のこと。
28）当村の落成式は水牛の購入も含めコントゥム省政府が積極的に関与している。当村の改良ゴングアンサンブルがカトリック教会の祭礼や政府主催の祭で頻繁に演奏していることからも，政府が当村を伝統文化継承の上で重要な村として位置づけていることが示唆される。
29）ベトナム中部トゥアティエン＝フエ省の農山村集落における伝統的な集会施設は，様々な社会状況の変容を背景に，より文化的・象徴的な役割を強く担うことになった（村下・小林 2009: 648）との指摘がある。

参考文献

A Đôi
2002 Lời Nói Đầu. In Dương Tôn Bảo và Phạm Cao Đạt (eds.) *Nhà Rông Bắc Tây Nguyên*, p. 1. Kon Tum: Sở Văn Hóa Thông Tin Tỉnh Kon Tum.

Asian Development Bank
2002 *Indigenous Peoples: Ethnic Minorities and Poverty Reduction - Viet Nam*. Manila: Asian Development Bank.

Bảo Tàng Dân Tộc Học Việt Nam
2006 *Đại Gia Đình Các Dân Tộc Việt Nam*. Hà Nội : Nhà Xuất Bản Giáo Dục.

Bùi Minh Đạo (ed.), Trần Hồng Thu và Bùi Bích Lan
2007 *Dân Tộc Ba Na ở Việt Nam*. Hà Nội : Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội.
Chu Thái Sơn (ed.) và Nguyễn Trường Giang
2005 *Người Gia Rai*. Thành phố Hồ Chí Minh: Nhà Xuất Bản Trẻ.
Dương Tôn Bảo
2002 Thử Đi Tìm Giải Pháp cho Việc Xây Dựng Nhà Rông Phù Hợp trong Bối Cảnh Cụ Thể ở Kon Tum. In Dương Tôn Bảo và Phạm Cao Đạt (eds.) *Nhà Rông Bắc Tây Nguyên: Kỷ Yếu Hội Nghị Chuyên Đề*, pp. 110–130. Kon Tum: Sở Văn Hóa Thông Tin Tỉnh Kon Tum.
遠藤　聡
2005 「行政改革の動向──地方行政を中心にして」『外国の立法』226: 161–170。
樫永真佐夫
1999 「ベトナム中部高原年表」『ベトナムの社会と文化』1: 396–405。
加藤敦典
2009 「「文化的むら」をめぐる「騒ぎ」──ベトナムにおける国家と住民の関係性をめぐる政策の人類学」『南山考人』37: 23–44。
国際協力機構（JICA）
2009 『中部高原地域における貧困削減のための参加型農業農村開発能力向上プロジェクトザーライ便り第 3 号』東京：独立行政法人国際協力機構。
小林広英・飯塚明子
2010 「ベトナム中部山岳少数民族・カトゥ族の伝統建築再現にみる在来技術──フエ省ホンハ社の伝統的集会施設を事例として」『日本建築学会計画系論文集』75(653): 1679–1686。
村下昇平・小林広英
2009 「ベトナム山岳少数民族の伝統的集会施設がもつ今日的役割に関する考察──ベトナム中部フエ省の農山村集落・ホンハ社を事例として」『日本建築学会学術講演梗概集 E-2　建築計画 2　農村計画　教育』pp. 647–648，東京：社団法人日本建築学会。
Ngô Đức Thịnh
2007 *Những Mảng Màu Văn Hóa Tây Nguyên*. Thành phố Hồ Chí Minh: Nhà Xuất Bản Trẻ.
Nguyễn Khắc Tụng và Nguyễn Hồng Giáp
1991 *Nhà Rông Các Dân Tộc Bắc Tây Nguyên*. Hà Nội : Nhà Xuất Bản Khoa Học Xã Hội.
Nguyễn Ngọc
2007 The Rông Community Hall, the soul of the village. In Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng, *Nhà Rông Tây Nguyên: Rông Community Halls in the Central Highlands of Vietnam*, pp. 37–43. Hà Nội: Nhà Xuất Bản Thế Giới.
Nguyễn Văn Kự và Lưu Hùng
2007 *Nhà Rông Tây Nguyên : Rông Community Halls in the Central Highlands of Vietnam*. Hà Nội : Nhà Xuất Bản Thế Giới.
日本民俗建築学会（編）
2001 『図説　民俗建築大事典』東京：柏書房。
Phạm Cao Đạt
2002 Phác Thảo Bức Tranh Toàn Cảnh về Nhà Rông ở Kon Tum (Thực Trạng Tới Tháng 7/1999). In Dương Tôn Bảo và Phạm Cao Đạt (eds.) *Nhà Rông Bắc Tây Nguyên: Kỷ Yếu Hội Nghị Chuyên Đề*, pp. 16–36. Kon Tum: Sở Văn Hóa Thông Tin Tỉnh Kon Tum.
2004 Lễ Hội Cộng Đồng tại Nhà Rông. Nơi Hội Tụ Nghệ Thuật Trình Diễn Dân Gian. In Viện Văn Hóa-Thông Tin, Tạp Chí Văn Hóa-Nghệ Thuật và Sở Văn Hóa - Thông Tin Kon Tum (eds.) *Nhà Rông - Nhà Rông Văn Hóa : Kỷ Yếu Hội Thảo Khoa Học*, pp. 116–129. Kon Tum: Sơ Văn Hóa Thông Tin Tỉnh Kon Tum.
Phùng Sơn
2007 *Một Số Tư Liệu Mỹ Thuật Dân Gian của Đồng Bào Các Dân Tộc Thiểu Số Tỉnh Kon Tum*. Kon Tum: Hội Văn Học Nghệ thuật Tỉnh Kon Tum.
Salemink, Oscar
2003 *The Ethnography of Vietnam's Central Highlanders: A Historical Contextualization, 1850–1990.* Hawaii: University of Hawaii Press.

佐藤正彦
2011 「ベトナム少数民族の集会場」『民族建築』140: 43–52。
新江利彦
2007 『ベトナムの少数民族定住政策史』東京：風響社。
杉本尚次
1987 『住まいのエスノロジー――日本民家のルーツを探る』東京：住まいの図書館出版局。
杉野孝典
1999 「ベトナムの柱建て祭り」『自然と文化［特集］アジアの柱建て祭り』61: 38–49。
Trần Khánh Lễ
2002 Để Trở Thành Nhà Rông Vân Hóa. In Dương Tôn Bảo và Phạm Cao Đạt (eds.) *Nhà Rông Bắc Tây Nguyên: Kỷ Yếu Hội Nghị Chuyên Đề*, pp. 86–101. Kon Tum: Sở Văn Hóa Thông Tin Tỉnh Kon Tum.
坪井善明
2008 『ヴェトナム新時代――「豊かさ」への模索』東京：岩波書店。
Vũ Khánh (ed.)
2007 *Người Ba Na ở Tây Nguyên : The Bahna in the Central Highlands of Vietnam*. Hà Nội: Nhà Xuất Bản Thông Tấn.
柳沢英輔
2009 「ベトナム中部高原ゴング演奏の現在――演奏形態と旋律に関する一考察」『アジア・アフリカ地域研究』9(1): 65–85。

ウェブサイト

Tuổi Trẻ
2011 Communal house rises from the ashes.
http://www.tuoitrenews.vn/cmlink/tuoitrenews/lifestyle/communal-house-rises-from-the-ashes-1.35907 (24 April 2012).